

【第四一回大会公開講演】

# 私が出会ったアメリカの語り

末吉 正子

## 一・ ケイト・マクレランドとの出会い

一九九〇年から一九九四年まで、夫の転勤に伴い、駐在員家族としてアメリカ合衆国コネティカット州のオールドグリニッジという町で暮した。その町の図書館（ペロット・メモリアル・ライブラリー）の児童図書館員、ケイト・マクレランドの語りが最初に「私が出会ったアメリカの語り」である。

ケイトは絵本のコレクターや児童文学のニューベリー賞の審査委員長を務めるほどの優れた児童図書館員であり、魅力的なストーリーテラーだった。聞き手の子どもたちとのコミュニケーションを大切にしながら語るその術を自然体で教えてくれた人、私の語り人生に多大な影響を与えてくれた人である。

私はアメリカに引越す前の八年間、佐倉市の図書館で子ども向けのお話会活動をしていた。また自宅で家庭文庫も開いていた。それでオールドグリニッジ町に引越すとすぐに、自宅

で日本人向けの家庭文庫とお話を再開した。その噂がケイトの耳に届いたのである。バブル経済の弾ける寸前のその当時、その町には日本人駐在員家族が急増していた。だが、現地の図書館に足を運ぶ日本人はそう多くはなかった。

「あなたがこの図書館でジャパニーズ・ストーリータイムを開いてくれたら、ジャパニーズマザーが子どもを連れて図書館に来てくれるかもしれないから、ここでジャパニーズ・ストーリータイムをやってくれないか？」

……日本人を集めて日本語でお話会をしてくれないかと依頼してきたのである。外国人に対して自国の図書館の門戸を開いてくれるとはなんと度量の広い国なのだろう！と驚いた。

こうしてペロットライブラリーでの日本語お話会がはじまったのであるが、私は自分が語るだけでなく、アメリカの図書館のストーリータイムとやらを体験してみたいと思い、ペロットライブラリーストーリータイムのボランティアスタッフを志願した。そこではじめて、ケイト・マクレランドの語りとお話会

たのである。

## 二．参加型語りとの出会い

初めて Audience Participation Style（聞き手参加型）の語りに出会ったのもケイトのストーリータイムである。

“TRAVELING TO TONDO ~ A Tale of the Nkudo of Zaire”  
という絵本からの語りで、ジャコウネコが友だちのハトやヘビやカメを連れて花嫁を迎えにトンドウという町に出かけて行く話なのだが、その道中の賑やかなこと、楽しいこと！聞き手の子どもたちに動物の鳴き声や掛け声の唱和や動作を促しながら物語を展開させていくその手法に私の心は浮き立った。一方的に語るだけと思っていたストーリーテリングに、こんな双方向の語りがあるなんて！それは嬉しい驚きだった。

ケイトは小学校や中学校への語りの出前にもたびたび私を伴ってくれた。中学生が語り空間に参加して自由闊達に声を出してくれる光景は嬉しかったし、ケイトの連れて行ってくれたアメリカ人の大人の語りイベントでも、大人相手に参加型の語りをするストーリーテラーが何人もいた。老若男女が語り会場で共に歌ったり唱和したりしている様子は何とも楽しく温かな光景であった。

語りの空間は語り手と聞き手の協同作業であると、よく言われるがその協同作業を目に見えるような形にした語りが聞き手参加型の語りである。

① 聞き手が語りに合いの手を入れるもの。

② 聞き手がお話の中に出てくるリズムカルな言葉の繰り返しや決まり文句、歌を唱和するもの。

③ 動作や手拍子加わるもの。

④ 語りの中に劇遊びが組みこまれていて、聞き手が登場人物として参加するもの。

⑤ 語り手からのクイズや問いかけに答えるもの。

……等々、その形態は多様で、聞き手は受け身でお話を聞くだけではなく、自分もお話に能動的に関わりながらお話は進行してゆく。語り手と一緒に声を発し、身体を動かし、歌ったり、繰り返し言葉の唱和したりして共にお話の世界を創り上げていく。声には不思議な力が備わっている。一方通行ではなく、聞き手も声を出して参加していくうちにいつのまにかお話が身体に染みついていく。身体がお話を覚えてくれるのである。

## 三．語りの夕べと忘れられぬひとコマ

ケイトはストーリーテラー達に呼びかけ、ペロットメモリアルライブラリーで、語りの夕べを開催していた。二か月に一度、七時から九時までコネティカット州および近隣の州のストーリーテラー達が集まり、車座になって語りを分かち合うのである。この催しに参加することによりたくさんストーリーテラー達と出会い、交流が始まる機会となった。

毎回、和やかに語りを披露しあい情報交換をして散会となるのだが、忘れられないひとコマがある。

ある時、とても堂々と素晴らしい声量と表現力で語っていた若い男性がいた。だが彼は天井の一点を見つめたまま誰とも目を合わせようとしない。自分の世界にすっかり入り込んで聞き手とのコミュニケーションを忘れてしまっているのである。猛烈な批判が始まった。「一度もアイコンタクトしなかった」「あれはストーリーテリングではない」「俳優の独白だ」「シエークスピア劇場で演じればいい」……と、容赦なかった。

「ストーリーテラー（語り手）のストーリーテリング（語り）」と、「アクター（俳優）のモノローグ（独白）……その違いは何だろうか？アイコンタクトしなかったただけであれだけ言われたのだ。

アイコンタクトしようとする気持ちの底に、語り手が聞き手と「つながりたい」と切に願う思いがこもっている。あの場にいた人たちはあの男性が物語空間の中に漂い、自分の周囲に透明な壁を作り、参加者と「つながろうとしなかった」ことを感じ取っていた。語り（ストーリーテリング）はコミュニケーションを土台として物語を分かち合う表現活動であるという基本線を彼は忘れていたのだ。

#### 四．聞き手とのコミュニケーション

当時、私はグリニッジ市教育委員会主催のESL講座でドラ

マ（演劇）クラスとストーリーテリング（語り）クラスの両方を受けていたのであるが、それぞれのクラスの指導には「聞き手（観客）とのコミュニケーション」に関し興味深い違いがあった。

ドラマ（演劇）クラスでは、「concentration」ドラマの空間に集中するように」といつも言われた。俳優はモノローグを語るときアイコンタクトをしないで、観客の頭の上あたりを見るようにと指導された。観客を見ない、ということは演者と観客との間に薄い膜が張られる。

一方、ストーリーテリング（語り）講座では、ストーリーテラー（語り手）はアイコンタクト（まなざしを交わすこと）を重要視するように指導された。語り手と聞き手の間にある見えない膜を破って互いに「受け止める」「つながる」ことを大切にするように……すなわち「語り」は語り手と聞き手が物語を分かち合うという協同作業で成立するものであるのだからと。

後日談になるが、日本に帰国してから、語りとコミュニケーションとアイコンタクトの話をしたところ、日本人の語り手の一人から、「アメリカと日本では国民性が違う。私は聞き手を見ることなんてできない」と言われた。なるほど、国民性……その言葉の前で私はそのとき黙ってしまったのであるが、表現方法は違っても、語りを通して「つながりたい」という底辺の思いは、日本人であろうとアメリカ人であろうと同じなのである」と信じている。そしてこの、語り手と聞き手の相互作用に関

し、優れた語り手は優れた聞き手でもあり、優れた聞き手は語り手を育てることができる、と信じている。それを教えてくれたのはアメリカ人のケイトだった。ケイトが語りを聞いているとき、心からうなずき、心から笑い、まなざしはいつもあなたかくやわらかであった。語り手としての私はケイトの反応が嬉しくて心も体も活力がみなぎるのを感じていたものである。

## 五. 各地のストーリーテリングフェスティバル

ペロットメモリアルライブラリーでの語りの夕べがきっかけとなり、その後私は各地のストーリーテリングフェスティバルに出演し、日本の民話を語る機会をいただいたが、どの会で語ってもアメリカ人の聴衆の豊かな反応に励まされた。聞き手の反応が「見える」し「声に出る」のである。とにかくよく笑う。そして出会う人が皆、「あなたのお話を分けてくれてありがとう」と言ってくれる。そう、アメリカの語りの世界で私は「シエアリングの精神」を学んだのである。

そしてまた「語り」は一つではないこと、聞き手参加型、タレント語り（二人で語る）、楽器を使う、……等々、自由で多様な語りのスタイルがあることも学んだ。以下、私が参加したストーリーテリングフェスティバルと印象的な語り手たちについて述べてみる。

### ★コネティカットストーリーテリングフェスティバル

#### &カンファランス

毎年四月末の土日、ニューロンドンのコネティカットカレッジにて開催される。主催者はコネティカットストーリーテリングセンター。ストーリーテリングの集会和分科会方式で語りのワークショップが行われる。語りのワークショップのテーマは様々であったが、印象に残っているのは「語りをどうやって覚えるか」という分科会だった。「暗記しようとしてはいけない。語りは暗誦ではない」という考えは当時の私にとって衝撃的であった。

### ★テラブレーション

十一月のサンクスギビングデーの前週末、夜八時より全米各地各会場で同時開催。教会や市民ホールを会場にして大人が楽しむ語りの集いが催されている。Telling（語り）とCelebration（祝典）をつなぎ合わせてTELLABRATION。これは提唱者の故J・G・パウパウ・ピンカートン氏（当時コネティカット州在住）が考え出した造語である。語りの集いを各地で同日同時に一斉に開き、語りの楽しさをわかちあおうという大規模な「語りの心の交流の祭り」である。アメリカの語り手たちの全国組織であるNSN（ナショナル ストーリーテリング ネットワーク）が主催し、世界中にテラブレーションの開催を呼びかけている。身近な人たちに語りの楽しさを知ってもらおうとい

う願いをこめて、一九八八年、コネティカット州のわずか六つの町から始まったテラブレーションは、あつという間に全米各地に、そして世界各地に広がっていった。その夜、各会場の語り手たちや聴衆は世界中の人々と語りの友情の輪でつながっていることを喜び合うのである。

私は三度、コネティカット州のテラブレーションに出演した。そこは新人ストーリーテラーの登竜門でもあるらしく、出演者はテラブレーションで語ることを誇りにしていた。新人も先輩ストーリーテラー達もそれぞれが興奮の渦の中にあり幸せそうであった。語りの集会の後には「リフレッシュメント」と称するパーティーがあった。その会場ではワインや軽食を囲んで語り手と聞き手がしばし歓談の時を楽しんでいた。「キックオフ」と称する準備会にも出席したが、チケット販売の相談をするにしてもリフレッシュメントで出される軽食の相談をするにしても、日本で見られるような憂鬱な雰囲気など全くなく、朗らかに、実に活き活きと楽しそだった。

これも後日談になるが、アメリカでのテラブレーションの意義に共感した私は一九九四年十月、山形県南陽市で行なわれた「第二回全日本・語りの祭り」の前夜祭で、「日本でもテラブレーションを！」と呼びかけた。その時、参加者の中から熱気にみちた賛同の声が沸き起こった。……のであるが、同日同時刻各地で同時開催という条件は日本の現状では難しいのではないかと暗礁に乗り上げかけた。そこで日本では十一月を「テラ

ブレーション月間」とすることにした。そして「だれかが、どこかで、語っている、十一月」(片岡輝 作)というキャッチコピーのもと、一九九五年、「語り手たちの会」が全国に語りの集いの開催を呼びかけ、テラブレーション・ジャパンが始まった。そして二年後、より大きな輪のひろがり願って、一九九七年(第三回)より「全日本・語りの祭り実行委員会」(現在の「NPO法人全日本語りネットワーク」)がこれを引き継いで現在にいたっている。二〇〇二年十一月にはテラブレーションの生みの親、J・G・パウパウ・ピンカートン氏も来日し、十日間の滞在の間に千葉県佐倉市、東京都オリピックセンター、福島県矢吹町、群馬県桐生市と四ヶ所のテラブレーション会場に福々しい笑顔と温かな語りを届けてくれた。

#### ★ナショナル ストーリーテリング フェスティバル

毎年十月初めの週末三日間、テネシー州ジョーンズボロにて開催される。インターナショナル ストーリーテリング センター (The International Storytelling Center) 主催。ジミー・ニール・スミス氏の提唱により、一九七三年より始まった。まるでおもちゃの町のような小さな田舎町に全米から一日一万人の参加者が集まる。町内のB&Bだけではもちろん宿泊施設は足りないからジョンソンステイのような近隣の大きな町からもシャトルバスが出る。フェスティバルの期間中はジョーンズボロ町民全員がスタッフとして働き、町を挙げての一大イベントとな

る。町の六カ所にサーカステントのような大テントが張られ同時進行で語りの集会が行われる。選ばれたゲストストーリーテラー二十人が一回三十分語る。私も二〇〇五年には二十人の一人として招聘されたことは名誉なことと有り難く思っている。

このフェスティバルで心に残ったストーリーテラーは数え上げたらきりが無い。私は一九九一年から二〇〇五年までの間に九回フェスティバルに参加して彼らの語りを聞いているのであるが、一人一人の語りをいつの時点（何年）で聞いたか記憶が曖昧である。その間に故人となった語り手もいる。とまれ、その情景を思い出すままに記してみることにする。

#### ① レイ・ヒックス

アパラチア山岳地帯からやってきた伝承の語り手、つなぎのジーンズボン姿のレイ・ヒックスが舞台上に現れ、語ったとき、聴衆が彼を大歓迎しているのだけは肌で感じるこゝとができたが、私には彼のアパラチアンアクセントの強い英語は全く理解できなかった。ケイトが「マサコ、レイの話がわからなくても、自分には英語がわからないと嘆く必要はないよ。実は私にもわからないのだから」と慰めてくれた。

#### ② ジョニー・モーゼス

先住民族のジョニー・モーゼスの話は昔話特有の繰り返し

があり、シンプルで実にわかりやすかった。彼が語っていると、話の途中で彼が「ヘイ」と言ったら聴衆は「ホー」と相づちを打ち、「ホー」と言われたら逆に「ヘイ」と返す。「聞いているかい？」「聞いているよ」というような意味合いだったのだと思う。語り手と聞き手の交流の暖かい空気が会場内を充たしていたことを思い出す。

#### ③ ジャッキー・トレンス

スタッフの介助でようやく舞台上にのぼると、巨体の彼女はまるで小山のように見えた。あの時が彼女にとって最後のジョーンズボロであった。ジャッキーの語る「ワイリー」と毛むくじゃら男」を聴くことができて私は幸運であったと思う。

#### ④ エド・ステイベンダー

愉快なエドがコミカルな動きでジャック話を語ると会場の大テントは笑いにどよめいた。人気者の彼は舞台で語るだけではなく町のおちこちで人々に囲まれて語っていた。ゴア副大統領がジョーンズボロにやってきたときは警戒態勢が凄かったが、さっそく翌日にはユーモアたっぷりに警察犬や屋根の上で見張っているポリスの話を即興で語っていた。

⑤ ブラザー・プルー

正式名はドクター・ヒュー・モーガン・ヒル。全身に蝶々の飾りをつけた独特の衣装を身に着けて、リズムカルに詩や物語を語る黒人のストーリーテラー。舞台だけではなく、常にカラフルな衣装を着て歩いていた。彼の声音からは愛と正義感と少しの狂気を感じた。常に夫婦で旅をしているらしい。「自分はトラベリングストーリーテラーだ」と親し気に自己紹介してくれた。

⑥ レフ・マーティン

夜、野外ステージで行われるゴーストストーリータイムで「雪女」を語った。雪女が去り行く最後のシーンは激しくたたみかけるような恐ろしい語調であった。北米先住民族から題材をとった話やアジアの話などを多く紹介して語っている。

⑦ エス・ノ・テック

ロバート・キクチとナンシー・ウオンによる舞踊の要素をとり入れたストーリーテリング・シアターは、東西文化を融合させた、新しいタイプの語りと言える。彼らは、日本、中国、フィリピンの血を受け継いでアメリカに生まれ育った。体内に息づいている「アジア」を、アメリカ的に明るく、ダイナミックに Eth Non Te は表現する。二人は、ま

さに「あうん」の呼吸で、語りながら舞い、舞いながら語る。優美な動きとそのコンビネーションプレイに観客は感嘆し、おかしなしぐさに笑いこぼれる。「ああ、これも『語り』なのだ!」……彼らのステージは、「語り」の持つ多様な可能性の一面を示してくれている。その華麗なパフォーマンスとはうってかわって、ステージ以外の場所での二人は、素朴な人柄そのもの、アジアに根を持つ者同士の親密さを感じずにはいられない、ひととなつこい笑顔で話しかけてきてくれた。

「一八八〇年にカリフォルニアに日本人のコロニーができました。私の祖父キクチ・ナカジロウが日本の八丈島から移住したのは一九〇六年のことでした。ナカジロウはカリフォルニアで、床屋やコックの仕事をしたそうです。……」

アメリカに入植した人々から教えると三世代目にあたる彼らは、祖父の世代の言語をすでに失っており、その哀しみがかえって自身のルーツへの激しい恋慕となって彼らの芸に昇華されているように思えてならない。

「日本の語り事情をもっと知りたいです。アジアの語り手たちとつながりたい!アジアの語り手が連携できる

ように力をあわせましょう」

と語ったロバートの声は今も耳に残っている。

⑧ ドナルド・デイビス

ジョーンズボロだけでなく、どこかのフェスティバルに行ってもマスターストーリーテラーと呼ばれ、敬愛されているストーリーテラーの中のストーリーテラーである。パーソナルストーリーを語る第一人者。彼の語る「おばさんの話」や「先生の話」に聴衆は抱腹絶倒し、最後はほろりと涙する。ユーモアとベータスを込めて語るドナルドの語りは各々の人生を肯定してくれる優しさに裏打ちされている。そして彼の聞き手とのコミュニケーションスキルが素晴らしい。例えばそこに千人の聞き手がいるとすると、ドナルドは千人一人一人に千個の言葉のボールを投げかける。そして千人の聞き手の「ウン」という反応の波をしつかり受け止めてから、再び言葉を繰り返していくのである。その「受け止めた」とはつきりわかる一瞬の「間」が素晴らしい。聞き手をしつかりと見て、聞き手と共に呼吸している。語り手と聞き手の絶妙なコンビネーション空間が広がっていくのである。

★ナショナル ストーリーテリング カンファランス

二年に一度、場所を変えて開催されている。ナショナル

ストーリーテリング ネットワーク (National Storytelling Network) 主催。全米からストーリーテラーが集まってくるが、ナショナルストーリーテリングフェスティバルのような祭りムードは薄く、学びのムードが濃い。

ワシントン州ベルリンハムで二〇〇四年に開催された時、基調講演者であったマーガレット・リード・マクドナルドが、海外で語るときの同時通訳者とのタンデムテリングのショーケース作品を語る共演者として私を招いてくれた。七月七日から十一日まで開催されたそのカンファランスでは三つの基調講演、二十七の分科会、劇場でのコンサート二回という多彩なプログラムが練り広げられた。個人的には「パーソナルストーリーを語る」をテーマにしたワークショップが特に心に残っている。

六. パーソナルストーリーを語る

先に述べたナショナルストーリーテリングフェスティバルでは、昔話よりもパーソナルストーリーを語る語り手が圧倒的に多かった。家族の話、一族の話、人生にまつわる様々な話の花が咲いていた。

ところで、私が最初に出会ったパーソナルストーリーはコネティカット州でのJ・G・パウパウ・ピンカートンの語りである。「金魚の話」「結婚式を妨害したかゆい虫の話」「大恐慌時代の父親の苦労話」「祖父の死んだ日の話」、それらが単なる「お

しゃべり」ではなく「語り」としてきちんと形成され心に届いた。伝わってきた。

二〇〇九年に参加したハワイのトーク・ストーリー・カンファランスでは、日系三世のアン・シモジマ（シカゴ在住）が自身のルーツを語っていた。顔は日本人そのものであるが、彼女も先述のロバート・キクチと同じように日本語は全く話せない。それでも突き動かされる「思い」があるのであろう。現在も第二次世界大戦下でのキャンプの話（親の世代の記憶）を語る活動を続けている。

ハワイ在住のストーリーテラー、ジェフ・ギアは写真だけでハワイへ渡った日本人花嫁の記録集を発行している。自身のルーツとは関係ない日本人女性の記録をきちんと残しておきたい、と願う彼の心には「何」が触れたのであろうか？耳の後ろで「語って」「語って」と囁いてくるモノがきつと存在しているに違いない。

## 七．語りたい気持ち

カナダのストーリーテリングフェスティバル（トロント、ユーコン、コートニー）で出会った語り手たちは昔話を語る語り手が多かった。先住民（ファーストネーションズ）の語り手を招くための助成金もあるらしく、どこに行っても敬愛の念をもって大切にされていた。

アメリカ合衆国でも先住民（ネイティブアメリカン）の語りは尊重される気運があつたところは高まってきていると思う。あるとき、ケイトと私はこんな会話を交わしたことがあつた。

(K) 「伝承の語り手はダイヤモンドで、私たちのような本で学んだ語り手はイミテーションと言われているのよ」

……(ああ、どこかの学者さんが日本でも同じことをおっしゃった、と聞いている) ……と、そのとき私は思い、こう応えた。

(私) 「日本でもそれは同じ。でも、子どもたち全員を伝承の語り手の住んでいるところに連れて行くことはできないし、世界中の子どもたち全員に昔話は必要。だからイミテーションと言われても、今このとき、まわりには子どもたちにお話を届けるのは私たちのミッションだともう」

あの会話から二十五年の歳月が流れた。今も私は変わらず子どもたちにお話を届けている。

(すえよし・まさこ／語りの勉強会 ゆうゆう塾)